

支えあいの「輪」の中で

長崎県立諫早高等学校附属中学校3年 松尾 若葉

今まで私は「税金」とは、日頃自分たちが通う学校での生活や人々が使用する公園や道路、ほかにも医療や年金、生活保護などどれをとっても人々が生きる上で決して欠くことができない大切なものに使われるものだと頭では理解していたつもりだった。

今年三月から始まった、いわゆる「コロナ禍」で、私たちの生活は大きく変わった。家から出れず、暗い気持ちで毎日過ごすことになっている。そして私たち家族の中でもこのコロナによって大切なことが奪われている。

昨年四月、私の祖父が亡くなった。最期は意思疎通もままならなくなったが、最期まで命を全うする大切さを私たちに残してくれた。そしてその一年後である四月、本当なら一周忌という形でまた、祖父の事をたくさんの人とともに思い出す機会がある予定だった。しかしそれがコロナで無期延期になってしまっている。父も母もどうにかして実施する道を考えてが、参列していただく方の安全を考えて、そういう決断をせざる得なくなってしまった。正直とても悲しかった。でも仕方がないことである。そして誰よりこのことを悲しんでいるであろう人がもう一人いる。それが私たちがコロナで奪われてしまったもう一つの事である。病床の祖母との面会である。

祖母は、心身のバランスを崩し、病院施設に入院している。私たちは時々祖母へ会いに行き、直接顔を合わせながら、祖母の話し相手になってきた。現在はそれができないのである。祖母は寂しく辛い思いを抱えてないかをオンライン面会という形で聞いてみた。すると意外な言葉が返ってきた。

「大丈夫ばい。みんながちゃんと世話してくるっけんありがたかばい。お父さんも安心しとるやろ。」

私はその言葉を聞いて、祖父と祖母の最期の面会の時に立ち会った時を思い出した。祖母は祖父の病床へ行き、手を握りこう言った。

「お父さん、長生きするとも楽ではなかね。でも、みんなが支えてくれて良かったね。ほんとにありがとね。」

その時祖父もうなずき、残りわずかな力で祖母の手を握り、涙を流していた。

私はその時、税金は目に見えるそして手に取れる支えをくれるだけでなく、目に見えない安心感を与えてくれるものだとはっきり理解できた。祖母は今、税金の支援により病院施設に入ることができ、安心した生活を送っている。それは祖父が生前しっかり働き、納税してしてくれたからである。また祖母がそうして安心した生活を送ってくれることが私たちの安心にもつながっている。そしてその私たちもいずれ、誰かを支える順番が回ってくるのだ。この支えあいの「輪」は決して絶やしてはならないことであり、私たちはそのためにも納税の正しい理由と使い道を正しく理解していかなければならないと思う。大切な人を支えられる人になるために。